

## 待遇表現の記述的研究と岡崎調査

西尾 純二 (大阪府立大学)

2009年6月6日(土)

於：神戸松蔭女子学院大学

### 1. 記述の目的

国立国語研究所が主導する岡崎市の敬語と敬語意識の経年調査では、「医者に往診を依頼する」「店への荷物預け」「バスで傘忘れを人に教えてあげる」「昔の先生に息子を紹介する」「見知らぬ人に道を教える」「魚つり少年への声かけ」など、過去2回の調査<sup>1</sup>ではほぼ同じ場面設定を刺激として、その場面への発話回答を得ている。

これまでの回答の分析では、発話内の丁寧語の有無や、尊敬語の種類などによって、丁寧度の段階付けが設定されていた(国立国語研究所 1957,170:171, 同 1983:62-64 など)。しかし、発話内の一つ一つの敬語形式が、体系全体の中でどのような待遇価を持つのかは不明な部分が多い。

たとえば、共通語の尊敬語「行カレタ」と、方言敬語の「オイキタ」「イカシタ」は、分析上、区別されることはない。方言を含む発話は、共通語のみの発話よりも、丁寧さが低いという分析結果はあるが(国立国語研究所 1957,243:244)、その分析は方言敬語だけではなく、様々な方言形式を含んだ発話全体を対象としたものであり、方言敬語そのものの待遇性は検証されてはいない。

また、第一次・第二次の調査結果の分析対象とならなかったが、待遇表現として機能しうる終助詞などの敬語形式以外の表現の待遇性も検証がなされていない。これら点を補い、経年調査の分析方法を再検討するための材料を提供すべく、小数のインフォーマントを対象に、岡崎市方言における待遇表現の記述調査を実施した。

### 2. 岡崎調査の分析例

これまでの岡崎調査の分析では、各待遇表現の丁寧度の段階付けは、たとえば表1のように行われている。発話回答のなかの敬語的要素の有無やその数で、丁寧さの段階が設定された。その段階付けは3段階の方法と5段階の方法があった。そして、このような方法で設定された段階を利用して、様々な分析が行われている。

---

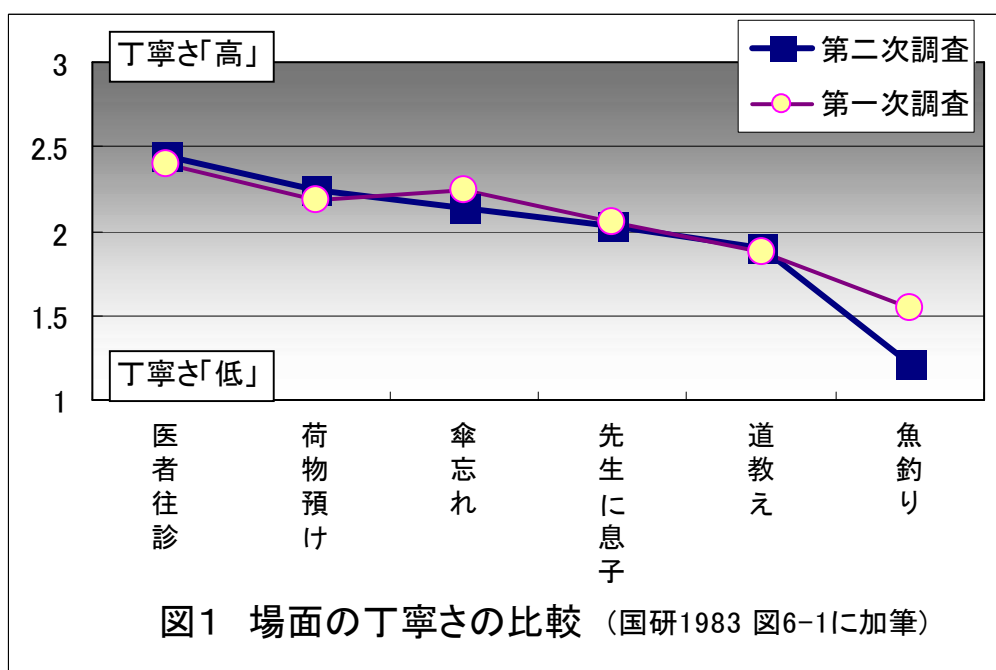
<sup>1</sup> これまでの調査は、第一回1952年、1953年、第二回が1972年、そして今回は2007年から2009年にかけて実施されている。

表1 第一次・第二次岡崎調査における「丁寧さの段階付け」の方法

	形式
段階1	(…デ)ゴザイマス, (…シテ)イタダキマス, (…シテ)クダサイマセ, イラシテクダサイなど, 大体 <b>二つの高い敬語形式の結合から成る</b> もの。
段階2	…デス・マス, (…シテ)クダサイ, イラシテクダサイなど, <b>一つの高い敬語形式から成る</b> もの。
段階3	…ダ, …ヨ, …シテなど, <b>高い敬語形式がないとみられるもの。およびそれよりさらに乱暴な形。</b>

(国立国語研究所 1983,62:64 に加筆)

たとえば, 表1の3つの丁寧さ段階を評点化して, 場面ごとに全ての発話の丁寧さ評点の平均を取ることで, 図1のように「場面自体の丁寧さ」が測定されている。図1の場面は, 実際の調査で設定された場面の一部である。



このような場面の丁寧さは, 発話回答の中に含まれる, 敬語形式の数を基準として算出されているのである。さらに, 国立国語研究所(1983)では, この結果を受けて, 「こちらが弱い立場に立っているときは丁寧になるし, 強い立場に立つと乱暴になる(p.65)」とした。ここでいう丁寧・乱暴という場面への評価は, 当然, 発話中の敬語形式の含有数から判定されたものである。

この判定は言い換えると「敬語形式は立場が弱いときに多く使用され、立場が強いときは使用されにくい」ということになる。以上の分析のプロセスは図2のように整理される。

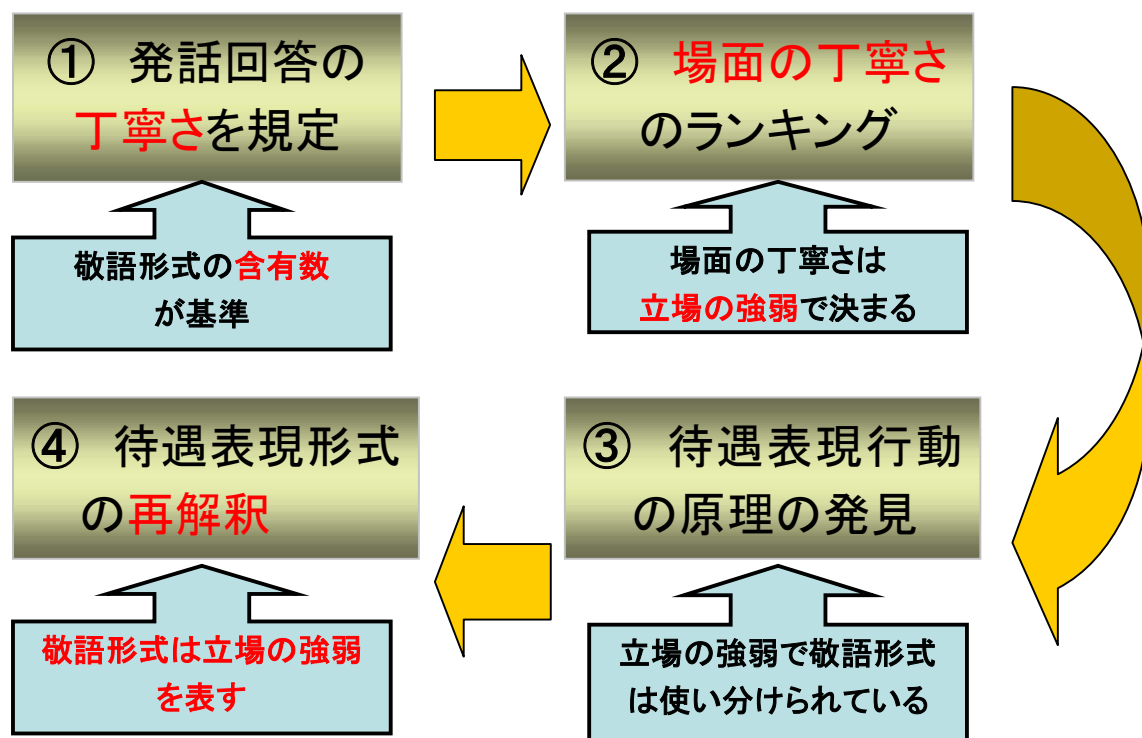


図2 岡崎市敬語調査の分析手法

まずは、①発話回答の丁寧さを「敬語形式の含有数」で規定し、②表現の使用状況から場面の丁寧さを測定する。その結果から、③場面間の丁寧さの順位から地域社会の待遇表現行動の原理を発見し、④その性質を各表現形式の待遇性として捉えなおす。

このような手法で、敬語と背景の生活や心理との関係を明らかにしようとし、そのあり方の経年的な変化を観察しようとするのが、岡崎市の敬語調査研究の大きな特徴である。注意したいのは、この分析は全て、①の分析段階、すなわち、表1のような敬語形式の含有数による段階付けが基礎としていることである。①の分析段階では、冒頭で述べたように、イカレタ・オイキタ・イカシタのあいだの丁寧度の違いは考慮されていない。

また、表1では、敬語形式を含まない発話回答は、全て第3段階として処理しているが、敬語形式以外の場面の待遇に関わる諸形式がどのような行動原理で使い分けられているかについては、問題にされていない。

### 3. 記述の方法

各敬語形式の運用体系が詳細に記述されれば、図 2 の分析段階①で敬語形式の含有数以外の分類基準を設けることができる。②～④の全ての分析段階に影響を与え、新しい知見を得ることができるだろう。今回の記述調査は、**丁寧さの段階付けのあり方を再検討し、新たな分析方法を模索するための基礎資料を提供するもの**でもある。記述調査は、概ね次のような方法で行った。

- ① 話者が日常生活の中で接触しているであろう、基本的な人物を調査者が提示する。提示した人物は次のとおりである。

旅行者 親しくない近所の人 住職・神主 上司 地元の名士 近所の小学生  
自分の父親 配偶者の父親 祖父 配偶者 息子娘 兄弟姉妹 孫 親友 旧友  
これらの人物を聞き手や話題の人物に設定し、質問文を方言翻訳してもらおう。

- ② さらに、日常の交友関係を尋ね、必要であれば、①以外にも人物を設定する。  
③ 設定された人物を話し相手、話題の人物として、その人物に対してどう言うか、発話回答を得る。  
④ さらに、その回答から得られた待遇表現形式が、どの設定人物に使用できる(できない)かを確認する。  
⑤ 最後に、得られた全ての待遇表現形式の丁寧度を順位付けしてもらおう。

①の人物設定は、あくまで話者本人の地域生活の実態を基にするため、①で設定した人物が話者にとって想定できない場合は、調査対象外とした。なお、今回、分析の対象とするインフォーマントは岡崎市生まれで、外住歴が4年未満の老年層話者(60歳以上)である。

### 4. 丁寧度の個人差

表 2 対者場面での待遇表現の丁寧度 (今日はもう買い物に行ったか?)

丁寧度	話者 A (男)	話者 B (女)	話者 C (男)	話者 D (女)
1	イカレマシタカネー	イカレタ↑	*オイキタカ	オイキタカ
2	*オイキタカネー	イッタ↑	イカレマシタカ	イカレマシタカ
3	イカレタカネー	イッタカン	イカレタカ	イカレタカ
4	*イカシタ↑		イキマシタカ	イキマシタカ
5	イッタカネー		イカシタカ	イカシタカ
6	イッタカン		イッタカ	イッタカ
7	イッター↑			オイキタ↑
8				イッテキタノ、 イッテキタ↑

\*印は、理解語形として内省されたが、使用する相手が内省されなかったことを示す。

表2は各インフォーマントが回答した形式を、丁寧度の順に並べた結果である。この調査結果からは次のような問題点を指摘できる。

1. 話者によって、内省される表現形式の数や種類にばらつきがある。
  - 音声変異や文法変異の調査では、ありえないような個人差。この現象をどう処理すればよいのか。
  - 方言敬語の使用者が限られているが、必ずしも方言敬語の丁寧度が低いわけではない。
2. 話者Aはイカレマシタ>オイキタという丁寧度だが、話者C, Dは逆。
  - イカレマシタは、表1では段階1と判定され、オイキタは段階2と判定される。しかし、話者C, Dにとっては、オイキタの丁寧度はイカレマシタよりも上である。方言形が共通語よりも乱暴だとは必ずしも言えない。
  - 話者Aは、社会的地位の高い職業に就いており、方言を使う(使える)機会が少ないと内省している。また、普段から「きちんとしたことばを使う」よう心がけており、標準語志向が強い。一方、話者Cは地元企業に長く勤め、現在でも頻繁に方言を使用しながら生活している。話者DはCの配偶者である。
  - ※ 一人ひとりの丁寧度の段階をパターン化して、そのパターン自体を集計することで、個人差の意義がつかめるのではないか。
3. 回答された方言敬語には、丁寧語が接続しない。
  - オイキ[マシ]タ, イカシ[マシ]タは話者の内省にはまったく合わない組み合わせ。
  - そもそも伝統的な岡崎市方言では、丁寧語があまり用いられなかった。過去の分析で方言発話の丁寧度が低くなりやすい。

オイキタカ(ネー) > イカシタ(↑, カ) > イッタ(カ)という方言敬語の待遇価の順位性は話者A, D, Eに共通する。方言敬語は、消滅に瀕していながらも、その体系性が崩壊しているわけではない。

## 5. 方言待遇表現形式の待遇領域

表3は、話者Aの調査結果を示したものである。縦には、回答された待遇表現形式を丁寧度順に、横には設定された人物を配した。表中の●は、各待遇表現形式が「使用できる人物」を示したものである。逆に表中の空欄は、各待遇表現形式が「使用できない人物」を表している。

### 5. 1 方言終助詞の待遇性

「魚釣り場面」を例にとると、次に掲げる全ての回答は、3段階評価法でも5段階評価法

でも、もっとも乱暴な形とされている(国立国語研究所 1983:342-347)。

201 M29 ボーヤ ツレルー

069 M29 ボーヤ ドーダイ ツレルカネー

070 M52 ボーヤ ドーデヤー ツレルカヤー

363 M54 ボーヤ ツレルカン ……(以下略)

215 M45 ボーヤ ヨク ツレルカ

しかし、表 3 からは、それぞれの終助詞が異なる待遇性を持っていることを読み取ることができる。

表3 話者 A 対者場面:「もう、買い物に行ったか」

設定人物 待遇表現形式	旅行者	疎近所	上司	地元名士	近所の小学生	父親	配父	配偶者	長男	長女	弟・妹	孫	親友	旧友	従業員
イカレマシタカネ(一)	●					●	●								
*オイキタカネー															
イカレタカネ(一)	●	●	●	●		●							●		
*イカシタ															
イッタカネ(一)		●						●	●	●	●			●	●
イッタカン		●			●			●	●	●	●	●	●	●	●
イッタカ					●					●		●			

\*印は、理解語彙ではあるが、使用する相手がいないと内省されたことを示す。

- ・ 小学生や孫には、終助詞カネーを使用しない。またカネーは、イカレタカネーのような丁寧語がなくても、上位者や親しくない人物への待遇がなされている。丁寧語に代わるとまでは言わないまでも、カネーは、やや高い待遇価を持っていると判断できる。
- ・ イッタカについては、小学生・長女・孫といった子供や身内の下位者にのみ回答される。カネーよりも待遇価は低い。別の質問文「さっき、地震のニュース見たか」においても、ミタカは小学生や身内の下位者(長男長女、弟妹、孫)に使用されている。
- ・ イッタカンは、上位者には使用されにくいものの、イッタカよりも待遇領域が広い。つまり、人によって使い分ける関係性待遇(西尾 2005)の性質は弱く、対人関係以外の要因で使用されると考えられる。

また、終助詞を伴わず、上昇イントネーションで疑問の意を表現することは、話者によって違いがあるものの、多くの場合は丁寧度が低い。

<行った>

話者 A	イッタカネー	>	イッターφ↑
話者 B	イッタφ↑	>	イッタカン
話者 D	オイキタカ	>	オイキターφ↑

<見た>

話者 A	ミタカネ	>	ミタカン	>	ミターφ↑	>	ミタカ
話者 D	ミラレマシタカ	>	ミラレマシターφ↑				
	ミマシタカ	>	ミマシターφ↑				

φは終助詞がないこと，↑上昇イントネーションを示す。

以上から，今回の調査で検証された方言終助詞の待遇性は，概ね次のように整理できる。

カネー > [(カン) > カ > φ↑]

※ カンは，対人関係以外の要因で使用されやすい。

※ カン，カ，φ↑の丁寧度の意識にはやや個人差がある。

また，カの使用は，小学生や孫といった子供と，下位者に用いられているが，「乱暴な形」とは言いにくい。表4の依頼表現においても，ミテミテとミテミンとは，近所の小学生や孫などの下位者を待遇している。丁寧度段階1は，終助詞を指標として，もう少し下向きの段階を設定することができるのではないだろうか。

表4 話者A 対者場面：こっちの地図を見てほしい

設定人物 待遇表現形式	旅行者	疎近所	上司	地元名士	近所の小学生	父親	配父	配偶者	長男	長女	弟妹	孫	親友	旧友	従業員
ミテイタダケマスカネー	●		●	●											
ミテモラエマスカネ	●		●	●											
ミテクレマスカネー	●	●											●	●	
ミテクレンカネー						●	●	●							
ミテクレンカン		●									●				
ミトクレンカン								●	●	●	●				
ミテクレン		●						●			●				
ミテ					●				●	●	●	●	●	●	●
ミテミテ					●							●			●
ミテミン					●							●			

## 5. 2 方言敬語助動詞・依頼表現の使用状況

「もう買い物に行ったか」「さっきの地震のニュース見たか」で出現する方言敬語助動詞が、どの人物に対して使用されるかを以下で確認していく。

話者 A 質問文「行ったか」ではオイキタカネーとイカシタ、「見たか」ではオミリター↑、ミラシタカン↑が丁寧度の上下の区別を保っている。しかし、ミラシタカン↑が親しくない近所の人に使用すると回答されたほかは、**使用する相手が内省されない**。

話者 B 「行ったか」では方言敬語助動詞の回答なし。「見たか」では、ミラシタカを親しくない近所の人、地元の名士に使用すると回答

話者 C 「行ったか」では、オイキタカはもっとも丁寧度が高い言い方として内省するが、**使用する相手が内省されない**。イカシタカはかつて勤めた地元企業の上司にのみ。「見たか」では、方言敬語助動詞の回答なし。

話者 D 「行ったか」ではオイキタカを住職・神主にのみに使用する。丁寧度がやや低い「イカシタ」は親しくない近所の人、地元の名士、配偶者の父親、親友・旧友とやや待遇領域が広い。丁寧度が低いオイキター↑は親しくない近所の人に使用すると回答された。「見たか」では方言敬語助動詞の回答なし。

これらの状況と、質問文「行ったか」での共通語の敬語助動詞の分析をまとめると、表5のようになる。

表5 敬語助動詞の待遇領域

	設定人物 待遇表現形式	旅行者	疎近所	上司	地元名士	住職・神主	父親	配父	親友	旧友
		方言敬語	オイキタカ					D		
	オミリタ									
	イカシ(ツ)タ(カン・カ)		D	C	D			D	D	D
	ミラシタ(カン↑・カ)		AB		B					
敬語 共通語	イカレマシタ(φ↑, カ, カネー)	ACD				C	A	A		
	イカレタ(φ↑, カ, カネー)	AB	A	ABCD	ABD	B	A		A	
	イキマシタ(φ↑, カ)	CD								

※A～Dは話者記号。近所の小学生、配偶者、長男・長女、弟妹、孫、従業員は省略

共通語の敬語助動詞では、旅行者というヨソの人物を待遇し、一つの形式で多くの人物を待遇できる。いっぽう、方言敬語助動詞は、待遇できる人物が限られている。旅行者とい

うヨソの人物を待遇することはできず、疎近所、上司、地元の名士、住職・神主、配偶者の父親、親友、旧友といった地元地域社会での限られた生活場面で使用されていると考えられる。方言敬語は、地域コミュニティとの関係が色濃い相手に使用されるものと見られる。たとえば、話者 C は上司にイカシタを使用すると回答するが、話者 C は地元出身者が多く、人間関係の密着度が高いと思われる地元企業に勤めていた。

丁寧度の高いオイキタは、話者 A や話者 C のように、語形は知っていても、使用相手がいなくなってしまう。ただし、さほど丁寧度が低いイカシタは、話者 D が広い待遇領域で使用すると回答している。

## 6. まとめ

敬語の使用や丁寧度意識は、個人差が非常に大きい。しかしながら、そのなかで、終助詞などを含めた待遇表現の運用体系を見出すことができた。方言敬語は、使用領域が狭いながらも、方言敬語内での待遇体系は維持しており、待遇価の高い形式と低い形式とははっきりしていた。さらに、オイキタのように、方言敬語形式が共通語の敬語よりも高い待遇価をもつケースも確認された。ただし、待遇価の高い方言敬語形式は、もはや使用できる生活領域を失いつつある。

対人関係からのみでは安定的な記述はできないものの、方言終助詞にも、各形式間に待遇的な差異が存在している。そして、共通語形式では記述できなかった下位者への待遇を担っていることが示された。

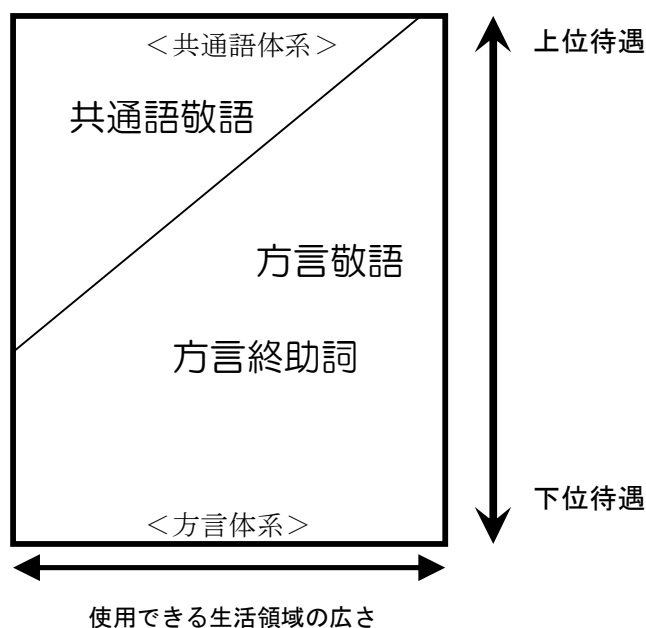


図3 岡崎市の待遇表現の運用状況

このようなことから、岡崎市の待遇表現の運用は、共通語と方言の二つの体系を利用し

ていることがわかった。これまで述べた状況は、図 3 のように整理することができる。また、一人ひとりのインフォーマントの職業や地域社会との関わり方によって、方言の待遇表現形式を多用するか否かも異なっている。

従来の岡崎調査で設定された場面性には、地域コミュニティに密着した場面が少ないように思われる。設定された場面と種々の待遇表現形式との関係を見直すことによって、従来の分析結果を地域生活の中で再度位置づけ、新しい知見が得られることが期待される。